

1. 授業反省 総合的な学習の時間(6年生 英語活動)

授業者(小学校): 子ども達は素直だが、思春期ということもあり、自分を表現するのが苦手である。できるだけ表情豊かに自分の気持ちを表現できるようにすることが課題だった。また、大きな場になるとよけいに自分を出せない。今日はたくさんの人の中でも、自分が出せ、自信がついたと思う。しかし、英語活動の時間は好きだが、難しいという抵抗感がでてきている。



授業者(中学校): 上下南小学校の英語活動へ、今年4月から乗り入れを始めた。去年の子ども達の状態を知らないのに、戸惑ったところがあった。子ども達が、緊張して萎縮してしまうのではないかと心配していたが、思ったより伸び伸びと活動していた。



今日の活動は、中学2年生で扱う「将来の夢」に繋がっていく内容である。ゲーム性のある活動であったら、もっと子ども達は盛り上がったのかも知れない。まずは、コミュニケーションということで[big voice][big smile][eye contact]を大事にした。子ども達は、とてもいい表情だった。11名という少ない人数ではあるが、いつも和気藹々と進めている。また、随分成長し中学生に近づいてきたと感じている。

2. 協議



英語活動のカリキュラムはどこにもない。各学校が独自に作っているのが現状である。全国的には、約90%の小学校が英語活動をしている。府中市の英語活動も6年生では、5時間から70時間とまちまちだが、20時間から35時間が全体の80%である。英語活動は、各校で工夫されてきているが、小学校の英語活動が中学校英語科にスムーズに繋がられてない実態がある。上下北小・南小で授業時

数・内容も違う。そのため、少なくとも中学校区で統一し、できれば府中市として英語活動のカリキュラムが統一できればと考えカリキュラム作成を始めた。

現在作成している小中一貫教育カリキュラムでは、小学校での英語活動の年間カリキュラムを1年生から、単元別に一覧にしている。学年ごとの時間数は、1年生・2年生では、教科外で18時間、3年生から6年生までは、総合的な学習の時間を使って年間3

5時間である。また、小学校の各学年との関連や中学校との関連がみえるようになっている。それぞれの学校には、これまでの取り組みがあるので、これが使えるところもあれば、まだ使えないところもあると思う。今年度は、各校がこれを使っていくなかで、内容を吟味していただき、修正をしながら完成させたい。



上下北小学校の5・6年生にも中学校の先生が入っている。同じ先生が入ることで、上下北小学校の授業と上下南小学校の授業を比較して見ることができた。小学校の先生とは、一緒にするのが難しいと思っていたが、だんだん小学校のHRTと息が合うようになってきた。中学校の担当者が小学校に入っていくことの大切さを感じている。また、小学校と小学校の橋渡し役という、大切な役割も中学校の先生がしている。

今日の授業を見て、小中の役割分担が十分にできていると感じた。どういうふうに役割分担をしているのか。

中学校教師は、「中学校の授業で出るんだよ。」ということ子ども達に伝えている。また、耳からの英語として楽しむため、英語での言い方や、発音は中学校の先生に、HRTは、子どもの学習意欲を高めたり、評価をするというようにしている。まず、先生自身が楽しんでいると感じた。次に、伝えられないもどかしさを子ども達が感じているから、先生に質問する場面がよくあった。意欲的だと感じた。そして、楽しむ、コミュニケーションであった。



子ども達には、大きな場に出ると、なかなか自分の力を出せないという課題があったが楽しんでいた。

中学校に向けてのギャップを少なくするためとあるが、どのようにギャップを解消しようと考えているのか。

ギャップ解消には、小学校で、中学校教師と、どれだけ人間関係をつくっているかだと思ふ。人間関係をつくるというのは英語活動の力ではなく、日常的な場であり、英語活動はそのひとつの手段だと考える。

3. 指導・助言



6年生にとっては、国語・算数に比べると、ゆとりがありゆったりして、楽しい良い時間だった。ピア・サポート訓練のようだった。

英語が楽しいというのではなく、活動そのものが楽しいのだと感じた。こういう授業では、コミュニケーション能力、情報活用能力を高める事にはつながらないだろう。

小学校の英語活動は、地道にしていかななくてはいけない。

英語活動を、府中市の教育としてどう考えるのかだが、母国語は、耳から聞き学ぶ。読み書きは、教育が必要である。英語は、第二言語で長い間読み書きから入っていた。しかし、英語は耳から入れるのが望ましく、中学校からでは遅いのではないか。また、小学校の英語活動で、何を学ばせるのか、はっきりさせる必要がある。

小学校同士や、小中で連携を図らなければならないが、連携をとるには時間が必要である。効率良くするには、何をどういうふうにし合うのか、小学校で何を獲得するのか“めやす”を考えてみてはどうだろうか。

小学校の英語活動が中学校で、どういう基礎になっていくのか、どのように繋がっていく“学び”なのかを考えて欲しい。また、指導案の書き方だが、単元が長いので、ポイントを絞って書くことが必要だ。



小中一貫教育検討会議の目標は、子ども達自身が伸びることである。先生達の連携を密にし、各学年段階でのカリキュラムの内容を確実に子ども達に教えてほしい。質の高いものを教え、各教科の内容をきちんと学んでいけるように保障することが大切である。

多くの学校では、教師間の連携はかなりでき、小中の連携もできてきた。教えている内容については不安があったが、今年は、9年間を見通して、学年間での内容などについて、関係を考えてカリキュラムをつくるのが大きなねらいになっている。

それ以外にも、生徒指導や行事、先生と子ども達の関係などについて、各中学校区で研究を進めてきた。

子ども達が、9年間が終わった時に、「確かな力（知・徳・体）を身に付け、人間として豊かに成長してくれた。元気いっぱいの中子に育っている。そんな子ども達になって欲しい。」ということが、ねらいだった。そのために、カリキュラムの検討をし、今日のように、小中学校の先生と一緒に授業づくりをし、授業改善等の努力を重ねてきた。

もうひとつお願いしたいのは、本当に、子ども達は伸びたのか、どういうふうにしたら、伸びるのか等について検証してほしい。課題になっているように、小学校から中学校にスムーズに入学できているのか、どうすれば、階段を上げるようにスムーズにいけるのか、つまづいていないかなどについて、振り返ってもらいたい。

10、11月には、多くの学校で公開研究会が行われ、集まる機会も多いと思う。ぜひ、このカリキュラムを指導案などで生かして欲しい。来年度は、準備の年になるので、準備にかかれるように、2学期、3学期、頑張ってもらいたい。

4. 各中学校区小中一貫教育中間報告

中間報告書は別に添付